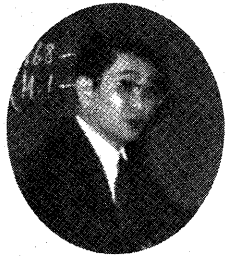
Title	「現代日本におけるキリスト教学校の存在意義」
Author(s)	古屋，安雄
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume1, 1986.12 : 4-32
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3214
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「現代日本におけるキリスト教学校の存在意義」



国際基督教大学宗務部長・教授　古屋安雄

私、この学校に参りましたのは久しぶりです。十二、三年前に一度参りましたことがありますが、その時から比べますと、建物も増えているし、とても立派な大学になったと、大変うれしく思います。この間、先生方において、また、職員の方々も一生懸命にこの学校のために尽されたであろうことを想像いたしまして、非常に感慨深い思いでいます。

きょう、私は、皆さんの同僚としてお話をいたします。何か講義をするようなつもりで来たのではございません。皆さんと同じように、キリスト教大学において、日頃教え、また働いている、その中で考えさせられていることを申し上げて、皆さんのご参考にさせて頂きたいと思っています。

本日、与えられました題は、「現代日本におけるキリスト教学校の存在意義」ということです。非常に大きな主題ですが、この問題について皆さんと一諸に考えてまいりたいと思います。先程の、クレーラ先生のご紹介にもございましたが、私、一九五九年にアメリカから帰ってまいりまして、今までずーっと、即ち二十五年間、同じ大学にいる

わけです。日本では、同じ大学にずーっと勤めてもあまり不思議ではありません。私はその間、六年か七年に一回、休暇の時にアメリカにもどっていますが、その度にアメリカの友達が、「今、何をやっているか」と聞くから、「ICUで教えている」というと、「まだいるのか」と言うのです。アメリカでは、同じ所にいるということは、あまり能力が無いということの証拠のようなものなのですね。能力のある人は、次から次へと、どんどんいろいろな所へ移るのです。私は、二十五年間ずーっといるわけです。能力があるのかどうか知りません。しかし、私にとっては非常にICUという所はチャレンジングな所なのです。非常に意義があると思っています。ですから、この学校も、同じキリスト教大学として、日本に今日あるということは、非常にチャレンジングな意味がある。みなさんも、そういう意味でキリスト教大学で働いておられるということが、非常に深い意義があるということ、また、チャレンジングであることを、私と同様にお感じになって、今後ますますこの学校のために尽くして頂きたいと、まず、お願いしておきたいと思います。

さて、「日本におけるキリスト教大学の存在意義」とは何か。ということは、逆に言えば、日本におけるキリスト教大学の存在意義が問われているのではないか――ということになるのではないかと思います。つまりこの主題は、けっして自明なこと、セルフ=エヴィデントな、誰にもわかっているもの――そういうものではありません。しかも、特に、こういう日本のようなキリスト教人口が非常に少い所で、つまり、一パーセントいるかいないかという国で、キリスト教大学があるということは、ある意味では、不思議というか、奇跡的なことですね。けっして、これは自明なことではないのです。

しかし、このことが、最近はいろいろな意味で問われている。これは、内外において問われていることです。外か

らも問われている。何故、このような時代にキリスト教大学があるのか。今、アメリカでは、ＩＣＵのようにInternational Christian University などと、〝クリスチャン〟なんて名前をつける学校は、ほとんどありません。〝テキサス・クリスチャン・カレッジ〟などというと、あぁ、それはファンダメンタリストの学校だな、と思われている。戦後創った大学などに、なぜわざわざクリスチャンという名称をつけるのか。「聖学院」の場合、まだ聖書の「聖」だからキリスト教と関係あるなと思うけれど、たとえば、「青山学院」、「明治学院」という名称を考えてみて下さい。どこにキリスト教と関係があると思いますか。アメリカでもわざわざ、今、〝クリスチャン〟とつけるのは、時代錯誤的ではないかという感じがある。昔は、ハーヴァードやイエールやプリンストンは立派なキリスト教学校であって、そういう自覚をもっていました。しかし、その学校が、わざわざクリスチャン大学だとは、今では誰も言いません。今頃〝クリスチャン〟すなわち「キリスト教」学校だ、など言うのは時代遅れではないかと思う人が、アメリカでさえいるわけです。

しかも、世の中はとうとうたる流れの中にあって、皆さんご存知のように、世俗化している。そういう時に、宗教に基いた学校をまた創ろうなどという試みは、時代逆行的で、今の日本ではたしてそういうものが必要であろうかと思う向きもあるかも知れません。特に大学としてキリスト教とどのように結びつくのかという疑問もあるかもしれません。そして、その問いは、外からきているだけではなくて、内にいる人、われわれのように中で教えている人、中で働いている人からも起こっているのであります。なぜ、キリスト教でなければいけないのか。キリスト教学校の問題に関わっていろいろやっていくと、最後にキリスト教にぶっつかるんです。

私が、アメリカから帰ってきたばかりの時、キリスト教教育同盟の夏期学校がありまして、そこで牧師（チャプレン）を頼まれたのです。その時は、「自然科学とキリスト教教育」という主題の夏期学校でした。参加者は主として自然科学を教

えている中学、高校の先生方でしたが、その先生たちが、自然科学の教育を徹底してやりたいと思うとき、いつもぶつかるのがキリスト教だ。たとえば、「礼拝の時間は動かせない」、「聖書の時間を減らすわけにいかない」と学校は言う。けれども、礼拝とか聖書の時間が本当に意味があるのだったら、いいけれども、聞いていても一番つまらない話をするのが礼拝の時間で、学生もそう言う、と言うんです。それで私は、立ち上りまして、「そういう礼拝ならやめたらいい」と言いました。そうしたら、その時たまたま、毎日新聞の記者が来ていて、次の日の毎日新聞に、「キリスト教大学の牧師が、礼拝をやめろと言った」と、こう出た（笑い）。それで大変な問題になりまして（笑い）、最近ＩＣＵに来た軽薄な青年牧師が変なことを言ったというので、私は、弁明書を書かされたことがあるのです。私はもちろん、礼拝を止めろと言ったのではない。みんなが聞いていて、同僚が聞いていてつまらないような、そんな礼拝の時間なら止めなさい、と言ったのです。ところが、それは、一つの例でありまして、おそらく皆さんの中にも同じようにお感じになっていらっしゃる方もおられると思います。こういう学校の教師として、あるいは職員として、一生懸命働こう、一生懸命研究しようとすると、何かキリスト教にぶっつかる。きょうも、本当は研究室で研究しようと思っていたら、こういう研修会をやろうなんて誰かが考えたりして、困ったもんだ、と――（笑い）。しかしこういう場合、たいていそういうのは怪しいんで、本当は勉強なぞしていない場合が多いのですが（笑い）。

いずれにしても、中にいる人でさえも、はたして今日、キリスト教的に教育をするということ、あるいは、キリスト教大学ということは意味があるのか、本当に大学になっているのだろうか、あるいは、キリスト教教育というのはあるのだろうか、といった、いろいろな疑問をもつだろうと思います。先程、西谷先生が読まれた聖書の箇所（Ｉペテロ３：一五）にも「弁明しろ」とありますね。この課題を受けとめることは大切だと思うのです。ただ、あそこには「慎しみ深く」ともありましたね。私はあまり慎しみ深い人間ではないので、そういう弁明ができるのかどうか知り

ませんが。とにかく、私は二十五年間の経験から言って、そして私の大学の性格から非常に国際的な関係が深いので、よく外国に出かけますが、世界の状況を見ていて、私は、ますますキリスト教の教育、そして大学というものは、意味があると思うのです。この問題は、非常に大きな問題ですから、きょう、一回だけで終わらすわけにはいかないし、皆さん、この第一回の研修会を端緒として、さらに深めていただきたいと思います。そのきっかけになるようなことを、きょうは、申し上げようかと思います。

まず、日本におけるキリスト教大学というものが問題になったのは、一番最近では、約二十年前ですね。あの六十年代の大学紛争のとき、皆さんもいろいろ経験なさったと思います。私もＩＣＵで大変苦労いたしましたが、あの大学紛争で、特にキリスト教大学で、キリスト教大学の存在の意義というものが問われた。ご承知のように、その結果、青山学院では、神学部をやめてしまった。関東学院、この学校でも神学部をやめてしまった。キリスト教大学がよってもって立っているところのキリスト教の学問的研究が神学です。特にそれに責任を持つべき神学部が廃止されたのです。その理由は、両者の場合、全く逆なのですが、いずれにせよ、二つの大学において止めてしまったのです。あの時、問われたのは、まさに、「キリスト教大学の使命とは何か」ということでした。あの時に、いろいろな議論がありましたが、私はこういう言い方をしたのです。

あの当時、私は、「今日、問われているのはキリスト教主義大学だ。私は、キリスト教大学の使命については、いささかの疑いももっていないし、その存在は、ますます大きくなってゆくと思うけれども、キリスト教主義の大学については、私は疑問をもっている」ということを言いました。おそらく、キリスト教信仰ということが、はっきりしないところでは、つまり、キリスト教主義で甘んじているような学校にあっては、キリスト教は失くなってしまうだ

ろう、と言ったのです。

「現代日本におけるキリスト教主義大学の存在意義」などと、私は言っているのではないのです。「現代日本におけるキリスト教大学の存在の意義」、そのことを問うているのです。キリスト教主義大学と日本でよく言いますね。「キリスト教主義」――これは、よく考えてみると、不思議な日本語です。英語では同じなのです。クリスチャン・スクール、クリスチャン・カレッジ、クリスチャン・ユニヴァーシティ、すべてこれは「キリスト教学校」です。「キリスト教大学」です。それをわざわざキリスト教主義と言う。〝――ism〟ですね。「クリスチャン・イズム」――そんな英語はないのです。これは、ただ、クリスチャン。しかし、日本では、いつしか、そういう名前がついたのですね。よく新聞の広告にあります。キリスト教主義学校という案内が。これは名前だけの問題ではなくて、実は深い問題を含んでいると思うのです。こういうキリスト教主義学校という非常に奇妙な日本語ができたのは、おそらく、戦争中だと思うのです。それまでは、ミッション・スクールと言ったのです。聖学院なんかも、みな、ミッション・スクールと言われた。ミッション・スクールという呼び方は、はじめは、アメリカの教会のミッション・ボード、すなわち伝道局がいろいろ援助してできたので、そういう呼び方になったのでしょう。あるいは、ミッショナリー、すなわち宣教師たちが創設した学校だから、そういう呼び方をした。ところが戦争になって軍国主義が擡頭してきて、英語を使うというのは、良くないということになった。それで、英語で言ってきたことを、全部変えたわけです。そのとき、ミッション・スクール・という名も改められて、出てきたのが「キリスト教主義学校」という呼び方なのです。

なぜ、キリスト教学校と言わないのか。「キリスト教学校教育同盟」というのがあります。「キリスト教学校教育同盟」であって、キリスト教主義学校と言っているのではありません。聖学院は、キリスト教主義学校と言わないで、キリスト教学校と言っておられると思いますが、この「キリスト教主義学校」という言い方には、ごまかしがあると

思います。キリスト教学校と言うと、つまりはですね、ストレートすぎるんです。キリスト教主義と言うと、ちょっと、ワンクッション置いている感じだ。子どもを学校に送っても、キリスト教の信仰を教え込まれるとなると、それはちょっと困るけれども、キリスト教主義、キリスト教的な文化を教えられる――そういうことならいいのではないか、ということになる。そこで、キリスト教主義という呼称の方が、一般の日本人には受け入れられやすいと思ったのです。私は、キリスト教学校で教えています。キリスト教大学で働いています、と言うよりも、キリスト教主義学校でと言った方が、本人も何となく気が楽だ、というわけです。教会というところは、キリスト教を直接教える所、伝道する所だ、しかし、学校は伝道の場所ではない、それは教育の場所だからという意味で、ワンクッションを置く、その意味で「キリスト教主義」になったのだろうと思います。しかし、ここに根本的な問題があると思うのです。キリスト教学校で教えるキリスト教は、水増しの、セカンド・ハンドのものでいいのか。本当のキリスト教だったら教会へ行きなさい。学校では、まあ、いいかげんなキリスト教でも仕方がないと。こういうことが言われるようになったのは、教会にも責任があるのです、昔から。私も、そう言われたほうですが、神学校を出て教会の牧師にならないで、キリスト教学校で教えるということになると、あれは二流の牧師だ、ちゃんと教会で勤まらないから学校にいっているのだ、あれは信仰がはっきりしていないからああいうことになったんだ、などと言われる。教会にもそういうことにしてしまった責任があります。

いずれにしても、「キリスト教主義学校」というとき、何か、そこではキリスト教ということをはっきり、鮮明に、クリアーにしないのです。この呼称は、そういうことを望む人々に利用されているのです。あいまいなのです。なるほど、その方がソフトに聞こえるかもしれない。しかし、はっきり申しますが、現代において、日本におけるキリスト教主義大学の存在の意義、存在理由はないと思います。そういった水増ししたものをいくらつくってもしょうがな

い。第一、わざわざ「キリスト教」と名づける意味もない。もし、意味があるとすれば、キリスト教学校、キリスト教大学と名づけ、その実質を問うていくときだけです。今日問われているのは、キリスト教大学であるのか、あるいは、キリスト教主義大学であろうとしているのかということ。キリスト教主義大学でいいと言うのであれば、何もこゝで研修会をやる必要はないし、私も話をする必要も無い。

こゝで、私が、キリスト教主義大学ではなくて、キリスト教大学と言うとき、いろいろな側面がありますが、あるいは、キリスト教大学の特徴というか、特色があると思いますが、少くとも三つの観点から、今日は考えてみたいと思います。これら三つの要素がなければ、キリスト教大学という名に値しない。ま、せいぜいキリスト教主義大学だろうと思います。また、これら三つの側面がもしなければ、キリスト教大学としての存在の意義は減少するか、あるいは、だんだんなくなってしまうだろうと考えています。

第一は、いわゆる人格教育（Personal Education）。Person to Person の人格的な教育。すなわち、いわゆる Mass Education ではない。今日、日本のみならず世界中いたる所で、いわゆるマス・エデュケーションが行われ、その結果、マンモス大学がどんどん増えている。そういった所では人格教育はできません。教師と学生の間に、絶えずパーソナルな、人格的な対話、人格的な話し合いができていなかったら、キリスト教教育と言えるでしょうか。いわゆるマンモス大学では、まさに何百人、何千人という人を相手にして、そこで機械を使いながらやるわけです。そうすると、そういうクラスでは教師と学生の関係は、〈私とあなた〉という関係ではなくて、〈私とそれ〉の関係になってしまう。学生は、皆、単なる学籍番号になってしまうのです。教師と学生のあいだに人格形成を確立しようと思えば、必然的に少数教育にならざるを得ない。

ところが、日本でキリスト教主義大学になってしまったということは、ある意味では、マス・エデュケーションの大学になったということでもあります。つまり、はじめ少人数教育をやっていた、いわゆるミッション・スクールは、戦後の日本の経済的な流れの中で、それに押されて、みんなどんどん拡大していったのです。それで、名前は有名になったかもしれない。だが、質を見て下さい。とくに、キリスト教の質を見たら、どんどん、それこそ水増しですよ。A学院にしたって、B学院にしたって。あゝいう大学に行って、どこにキリスト教の香りがしますか?まったく普通の世間の大学と同じですよ。それでもキリスト教と呼ぶから、そこで「看板に偽りあり」ということになる。第一、A学院などに志望している学生で、「こゝは、キリスト教大学だから来た」というような学生は、ほとんどいませんよ。いわゆる後進国が先進国になる時に、一番手っ取り早い方法は、教育に投資をすることです。そういう意味では、日本は先駆的でした。だから東南アジアでは、みんな日本のまねをしろとなった。日本が、なぜ近代化に成功したか?教育のおかげです。これだけ教育熱心な国民はいませんから。だから、猫も杓子も学校、学歴というわけだ。そうすると学校拡張となる。そのためにはお金がいる。そのためにはマンモス化しなければならない。これは経営者の論理です。経営者の論理が勝つか、教育者の論理が勝つか。経営者の論理が勝った学校では、もはやキリスト教大学ではないと言える。キリスト教主義大学だ。残念ながら、かつてのキリスト教大学の多くは、その誘惑に負けて、どんどん拡充していった。身の程も知らずにですね。教授の数も増やした。けれども、クリスチャンの教師がある程度の数いなくて、どうしてキリスト教教育ができますか。不可能ですよ、そんなことは。そんなこと、よく知っているくせにやる。それだけ人を増やしておいて、どこでキリスト教教育ができますか。数だけを増やせば、量だけを増やせば、質的に必ずだめになります。とくに、キリスト教教育の質は下がります。

つい数ヶ月前に、私は隣りの韓国のソウルに行ったのですが、あそこに、梨花大学という有名なキリスト教女子大

学があります。これは全世界で最大の女子大学です。二十年前に私が行ったとき、学生数八千人でした。今、一万二千人です。今度、新しい大統領の命令で、倍の二万四千人にする。だから今、教授会は大変なのです。二万四千人というのだったら、今の教授数の倍は要るのです。とすると、教師がいないから、どうしたって誰でもいいから集めてくるというようなことになるわけです。だから、学生の質は下がる。先生の質も下がる。あまり多くなるから、もちろん学生が入る講堂もチャペルもない。今まで、ちゃんと礼拝できていたのに、礼拝ができなくなる。そうすると、礼拝に出るのも自由にしましょうという考え方になる。だから梨花大学のクリスチャンの教授たちは、非常な危機感を持っています。

このように、今、教育ということは、国と国の national policy 又は、national investment の対象なんです。だから、どこの政府も一生懸命やっている。そして、質などとぜいたくなことは言っておれない。数をつくりたいのです、どんどんと。それを日本なんかでも、今までやってきたのです。そういう中にあっては、何もキリスト教主義大学というものを存在せしめる必要はないんです。いわゆる公教育（public education）がものすごく盛んなんですから。しかも授業料は安いのですよ。それにもかかわらず、わざわざキリスト教大学をつくるというのだったら、一般大学に無いものがなければ存在意義はありませんよ。では、どこで勝負するか。質で勝負する以外にありません。物として扱われている教育をするのではなくて、〈私とあなた〉の教育を実現していかねばならない。学校を卒業したときに、あの先生、この先生の顔を思い出せないような学校はだめですよ、キリスト教大学として。ところが、だんだん今、そういう風になりつつある。非常にはっきり言えば、キリスト教大学というのは大きくなればなるほど、人数が増えれば増えるほど、キリスト教の質は下がる、と考えていいのです。量の増大は、質の低下をもたらす。これは、学生も教師もそうなるのです。とくに、キリスト教というのは、人格的な真理を伝えるという宗教ですから、そういう環

境が破壊されれば、人格教育を行うというのは無理です。今のように数が多くなっては不可能です。従って、キリスト教大学というためには、ある適正サイズというのがあると思うのです。ある限度があるはずです。しかし、それを維持しようとすることは、もちろん大変なことです。経営者の論理から言えば、どうしたって学生数を増やしたいのですから。それと戦わなくちゃだめです。私の大学は、少人数でやったのです。二十五年前に行ったとき、一年百五十人でした。四年生まであるので六百人でした。六百人を相手にしてやっているときと、今の二千人という場合とでは、全然、雰囲気が変わりますね。卒業生が、皆、言いますよ。「あゝ、昔はよかった」と。やっぱり少人数のときには徹底しますね。一人一人の顔も名前もわかる。今、卒業生と顔を会わせると、すぐ、「おお、××君、○○さん」と言える。しかし、最近の卒業生はむずかしい。どこかで見たような……とは思うけれどね（笑い）。だから、そんな風になったら、何もわざわざつくらなくてよかった、ということになる。それではだめです。やはり質的に言って、他の大学では、キリスト教大学でないところではできないような教育をしなければいけない。それが、人格教育だと言っているのです。

アメリカでも、いわゆるクリスチャン・カレッジ、はじめに言ったように、クリスチャンとは名はつけないけれども、いい大学というのはあります。いわゆる有名校じゃあなくて、小さいリベラル・アーツ・カレッジだけれども本当に子どもの教育を考えている親が送る学校がある。それはみんな小規模です。たとえば、スワスモアだとかハバフォードだとか、アールハムだとかアムハーストといった大学ですね。そういうキリスト教で始まった小さなカレッジでは、学生数は千人、二千人ですよ。そのかわり、そこにいる先生はいわゆる学者としては有名ではないかもしれないが、教育者としては一流の先生がいるのです。そういう学校から大学院に行く学生が一番多く出るんです。ハーヴァードやプリンストンよりも、大学院へ行く学生が多いのです。六〇、七〇、八〇パーセントが大学院へ行くのですよ。

リベラル・アーツの教育をしっかり受けているのですから。そこではじめて勉強したいという動機づけを与えられるんですね。それから、神学校とか法律学校（ロースクール）だとか医学校（メディカルスクール）だとかへ行くわけです。その率が一番高いということは、学校の教育で非常に高い教育をしているという証拠です。丁寧な教育をしている。そういう学校が多くあります。私は、将来日本において、キリスト教大学がめざすべき一つの模範があるとすれば、あゝいうアメリカの小規模な、しかし質のいい大学だと思ってます。クオリティー・カレッジ。クオリティー・ライフという言葉がありますが、クオリティ・エデュケーションの学校、そういう学校にならなければ、わざわざキリスト教学校、キリスト教大学という名にふさわしくないのではないかと思うわけです。

さて、第二は、国際教育、あるいは国際的な教育ということでお話しします。つまり、International Education. 先ほど言いましたように、今日、教育をするということは、国家的な仕事なのです。国家的な発展、経済発展のために、国がそのためにものすごいお金を投資して教育している。もちろん、それには意味があるけれども、そうなるとどうしても国立大学、あるいは公立大学ということになりますね。そして、そこでの精神的な基盤は何かというと、それは良い意味でも悪い意味でもナショナリズムです。これは、しようがない。東京帝国大学の創立の文章を見ればわかるのです。あれは、日本の国家の官史を作るために作ったのです。そういう意味で、そこで学ぶ学生が、思想的にあまり自由に考えては困るのです。あまりオリジナルな人を作っては困る。だから、東大法学部を出れば、ほとんどは、けっして政府に反抗しないような官史になるのです。そういう大学が、いっぱいある時に、わざわざキリスト教大学を作るというのだったら、私は、キリスト教学校はインタナショナルでなくてはならないと思う。幸いにして、初めからミッション・スクールには日本人でない外国人がいましたね。たとえば、クレーラ先生のような方がおられ

るということは、大変よいことなのです。そういう人と一緒になってやっていくことが、インターナショナルということです。人間というのは、自然にほうっておけば、かならずナショナリスティックになっていきます。とくに日本は、鎖国をずーっとやっていましたので、非常に見方が片寄っているわけです。しかし、今や全世界がどんどん国際化している時代ですから、もはや、そういう鎖国はできない。だから、今後ますますそういったナショナルでない、インターナショナルなパースペクティヴを持った人を作る必要がある。これは、公立学校や国立ではできません。キリスト教大学ならできるのです。そういう意味で、私は、キリスト教大学の特質として、将来とも大いに主張しなければいけないのは、そういうインターナショナルなものの見方だと思います。そこから、学問的に言えば、国際関係論とか国際政治だとか国際経済とか、いわゆるインターナショナルなものが入ってくるのです。

しかし、ただそれだけを増やしたってだめです。本当に国際的とはどういうことかと言うと、やっぱり一つのナショナリズムと、もう一つの別のナショナリズムとが出会ったとき、相手を理解できるということです。他の人の視点に立って見ることができる。それがなければ、インターナショナリズムと言っても、内実、ナショナリズムを基調にしてやっていると、相手を理解するどころか、相手を馬鹿にすることになってしまう。今日、世界がだんだん狭くなってきたということを、皆、しきりに言いますが、しかし、だからといってみんながいろんなニュースを聞いていれば、すぐに国際的になっているかと言えば、そうではありません。逆に、ますますこの頃は「何だ、世界でもこんなに進んでいるのは日本だけだ」といばっている。アフリカの飢餓の問題にしたって、「何だ、あんなかわいそうなことをやっているのか」という程度の受けとめ方です。なぜ、彼らはそういう風に貧しくなったのか、それと日本の経済とどう関係しているのかというようなことは考えもしないで、非常に軽薄なインターナショナリズムで動いている。英語をちょっとペラペラしゃべれると、それで国際的だと思っている。そうではないのです。これは、他の言い方をすると、

複眼的な見方、昆虫学的な意味ではなくて、二つの目、一つの目ではなくて二つの目で見る見方が必要だということです。神様は、我々に二つの目を与えたもうたのに、ナショナリズムの教育のおかげで、その二つが一つになってしまうのです。

ＩＣＵで、七、八年前から帰国子女のための高等学校を作りました。外国に長くいた子どもが帰ってきて、それを受け入れるときに、日本の一般の小、中、高校の先生は、みな、非常にめんどうくさがる。帰国子女というのは問題児だというのです。どうしてかというと、「授業のまっ最中に『はーい』と言って質問をする」と言うのです（笑い）。そうすると、先生も他の生徒もみんないやな顔をする。黙って聞いていればいいというわけです。ところが、外国ではそういう教育をしていないのです。それをやると、「あいつはおかしい」となる。中国の昔の話にこういう話がある。

ある所に、一つ目の猿の群集が住んでいた。そこに、二つ目の猿の子が紛れ込んだ。そしたら、みんなが「おかしいよ。あれは目が二つあるよ」と笑った。で仲間に入れてくれない。そこでその子ざるは、石で自分の片目をつぶして一つ目になった。そうしたら、やっと、みんなが仲間に入れてくれた。

こういう話しです。日本の帰国子女というのも、みんなそうなのです。日本的でない見方をもって帰ってくると、「あいつは問題児だ、おかしいよ」と言う。そして日本と同じように同化しなければ受け入れてくれない。日本の教育は、そういうことをやっているのです。そして、おかしなことに大学を出ると、今度はあわてて国際教育しましょうと言っている（笑い）。一度つぶしたものを、またもう一度くっつけようったって、そんなことはできはしません。はじめから、神さまは二つ目を与えてくださっているのではありませんか。それなら、ちゃんと、両方教えなければ

いけない。ナショナリスティックな日本の視点からの見方というもの、つまり日本の歴史を学び、それと同時にインターナショナルに世界の歴史も学ぶ。そのことが、キリスト教大学では可能なのです。戦前のミッションスクールは、国際的な教育をしていたが、戦後はおかしなことにそんなことは止めて、ますます、ナショナリスティックになった。キリスト教大学の学長で、アメリカ人というのはこゝだけではないでしょうか。そういう意味では、聖学院はえらい。そういう人事は戦時中に全部止めたのです。最近は、国立大学でもやっと腰を上げて、東大あたりでも外国人の先生を入れようと言っている。それなのに、キリスト教大学の方が、もういらないと言う。全く逆ですね。むしろ、公立や国立の方が、国際教育に熱心になってきた。それにたいして、キリスト教大学の方は熱心ではない。めんどうくさいのです。一つ目でいいのに、二つ目を要求するから。しかし、そのめんどうくさいところに、キリスト教大学の存在意義があるのです。意義のあるものというのは、みんな、めんどうくさいものです。いいですか、それを心得るべきです。キリスト教大学というのは、普通の大学にはないものがあるからめんどうくさい。しかし、そこに意義がある。そういう意味で、他の公立や国立の大学ではできない、インターナショナルな人材づくりのための教育をする。それがなければ、わざわざキリスト教大学と呼ぶに値しないだろうと考えています。

第三は、宗教教育、キリスト教教育ということです。これこそ、国立や公立では絶対にできません。私立大学でしかできないのです。しかも、私立の中でも、キリスト教や仏教などという宗教によって建てられた学校でない限り、宗教教育はできません。それがキリスト教大学ではできるのです。私がここで言う宗教教育というのは、いろいろな学問を教えたうえで、その端の方に、何か人生についての教訓的な教えを付けたしたらいいというようなものではありません。なぜ宗教が必要かというと、教育を全体的かつ根源的な人間教育にしようと思ったら、宗教教育を避ける

ことはできないと思うからです。いかにしてもうけるか。いかにしてしゃべるかを教えるのではない。人生とは何なのか。我々はどこから来てどこへ行くのか。人間とは何かというような、それこそトータルかつラディカルな問い、これが宗教が関わっている事柄です。ですから、宗教教育というのは、部分的、断片的な教育ではないということです。

最近の大学のカリキュラムはますます専門化していて、部分的、断片的になっていますね。たくさんのことを、学生はバラバラに聞いているわけです。社会学の教師と心理学の教師とでは、お互いに関係ないようなことを言う。そして、学生は、そこでほったらかしにされる。外からバラバラに入れておいて、あとで自分でそれをまとめろと学生に要求しても、それは無理な話ですよ。それを助けるのが、我々の本当の仕事なんですよ。情報過多ですからね。情報が入っても、みんなどういう風にそれをまとめるかができないのです。それをするのが、宗教教育なんです。現在では、全体的な教育、統合的教育の必要性が言われています。いわゆる holistic な見方ということです。部分と全体とが一緒になっている人間を育てる。それが宗教教育なんです。

宗教的ということは何か。人生のあとの、死んだ時のことを言っているのではないのです。とくにキリスト教は。現在、何に向って生きるのか。それを考えるのが宗教です。あるいは、他の言い方をするならば、宗教教育というのは深みの教育、depth education です。大学というところは、真理を探究するところ、あるいは、真理を教えるところです。そして、真理は、表面的なものではなくて、表面的に見たものよりも、もっともっと深いものです。この深みの次元にあるもの、それを真理という。自然科学や人文科学や社会学がこうだと言うときに、そのもう一つ深いところの真理を探究する行為、これが宗教なのです。だから、先ほど言ったように、それは、全体的かつ根源的な教育なのです。キリスト教概論で、そういう面には到達しないままで、聖書の単なる知識だけ、そんなことを教えるから

ますますつまらない。

神の存在を探究するということは、「最も深いもの、最も根源的なもの、最も究極的なものは何か」という問いに、究極的に関わるということです。人間の最も根源的なところで、人間を考えようということなのです。人格の一番奥底まで行ってごらんなさい。人格的な神にぶつかります。外国人も自分と変わらない同じ人間と見る国際的な見方ということでも、それを本当につきつめてごらんなさい。人間が平等だってことは、信仰なしに言えないのだということにぶつかるんです。教育の現場では、人間は平等ではないのだ、ということでやっている。偏差値とか、点数をつけてますね。そうではないですか。にもかかわらず、人間はみな平等であるとはどういうことですか。一番深い根底に立たなければ、平等とは言えませんよ。そういう最も深いところで、人間とか自然とか世界とかを考える。それが真の教育だとすれば、宗教をぬきにしてほんとうの教育というものはありえないわけです。

以上、三つの側面あるいは特色こそ、キリスト教大学という看板を掲げるのに欠くことができない要素だ、と私は思うのです。少くとも、この三つは欠くことはできない。では、それを担うのは一体誰か。それが、我々教師なのです。あるいは、職員を含めてそうなのです。今日は、教師の他に職員の方も出席されておりますが、ＩＣＵで私が職員の方々にいつも言っているのは、こういうことです。つまり、職員の方も、教室では教えていないけれども、やっぱり実際の仕事を通して学生たちに教育しているということです。

さて、ここで私は、職員も含めた仕方で、キリスト教大学における以上の三つの重要な要素に関する具体的な示唆を皆さんに聞いていただきたいと思います。

数年前のことですが、ある学会の学会誌の編集長を私がしておりましたとき、わずか数十万円だが文部省から補助金をもらいました。経験のある人にはわかるのですが、あれは、いろいろなわかりにくい計算をするのですね。それで、ちょうど数十万ほど足りないように計算をして出すわけです。私は、数学は得意じゃあないのでいやになりまして、若い者に作ってもらった。そして、私の名前で提出しました。と、あるとき、文部省から電話がかかってきて、「すぐ来い、この間の申請書には間違いがある」と言うんですよ。私は行きたくなかったが、行きました。中川先生がその時の学長で、文部省と関係深い人だから、「古屋さん、文部省に行ったら、言いたいことポンポン言っちゃあだめですよ（笑い）。何か言われても、だまっているように」と注意された。行ったらですね、狭い所にいるので、私も気の毒になったけれど、「ＩＣＵの古屋です」と言って入っていった。そしたら、お役人がね、私の顔も見ないでですよ、「ああ」と言ったかと思うと、「これ、こんな単純計算できないんですか。みんな間違えている。これじゃあ、困りますね、こんなのは」と言うわけです。座われとも言わないんですよ。こうやって、紙をひらひらさせてね。そしたら、横にいた人が気の毒がって、「先生、どうぞ」と椅子を出してくれた。それから、しようがないから書き改めたんです。そして、出した。そしたら、「ああ、何しろこういうのが全国百二十校ばかりあるんです。こういう間違いされると、こちらは大変迷惑です。第一、これ、お国のお金ですからね」ときた。そのとき私は、「お国のお金って僕らの税金だよ」と言ってやりたくなりました。依然として、おカミの金という考え方があるのです。それを配ってやると思っているのですよ。税金で、彼らも食っているじゃあないですか。そう言ってやろうかと思ったけれど、学長の言ったことを思い出して、「んーン」とこらえた。そこで、しゃくにさわったので、昼間だったけれども、ウイスキーを飲んで帰ってきた。そして、次の大学礼拝のチャペルで、「キリスト教と官僚主義」という題で説教をした（笑い）。そして、学生たちに「君たちは、ＩＣＵで教育を受けて、もし文部省へ入ったら、あ、いうとき、どう

いう態度をとるか。あの役人と同じ態度をとるのか」と聞いたんです。礼拝を終って、ディスカッションのとき、「先生、何も文部省へ行かなくたって、ＩＣＵの職員の態度をみたら、官僚主義がどういうものかわかりますよ」ときた（笑い）。いくら、牧師や教授たちが教室で人格教育がこうだ、キリスト教はこうだと言ったって、職員がそういう態度でいるなら何にもならない。

私は、日頃から言っているのです。大学という所は、三位一体なんですと、教師と学生と職員が。今日の日本の大学は、特にいけない。三位一体じゃあない。大学は、あたかも、教師と学生だけで成り立っていると思っている。職員たちは、疎外されている。その職員の人たちが、官僚的になったら、全然だめです。しかし、これは教師の人たちも注意した方がいい。中でも、クリスチャンの先生は、注意した方がいい。職員の人たちは、厳しい目で見ている。その大学が、本当にキリスト教精神で生きているかどうかということは、チャペルや教室だけじゃあわかりません。日常の業務の中に現われるのです。毎日、人間味のある親切な職員に出会っている学生は、将来、社会に出たときに、こんどは、彼らが他の人に接するとき、それがその態度に現われるのです。だから、人格教育というのは、ただ、教師だけでできるのではない。まさに、日常業務の中にでてくる。さきにのべた三つの側面を担っていくのは、職員を含むわれわれ教職員なのです。

つぎに、教師の問題として考えていくと、人格教育というのは、われわれが学生と触れるときに、パーソナルにどこまでやっているか、ということになってきます。そのために、いわゆる日本語で言われている人格者になる必要はありません。高潔な人格、そんなことは必要ではない。まったくありのまゝでいいのです。人格者ぶる必要もない。クリスチャンぶる必要もない。人間のまゝでいいのです。人間と人間の中で、人間教育、人格教育ができる。そこで〈私とあなた〉、〈僕と君〉の関係を学生と持つ。ところが、最近ではキリスト教大学でも、だんだんサラリーマン的

な教師がでてきて、これができなくなっている。サラリーマン的教師というのは、学生が急用で会いに来ているのに、自分は研究や委員会で忙がしいからと、追い返してしまう教師です。それじゃあ教育はできません。

私が牧師として二十五年間やった経験談の一つをお話ししたいと思うのですが、私は学生が会いたいと言ってきたとき、何時であろうと「ノー」と言わないことにしています。そう言わないようにしたのには、ある経験からの教訓があるのです。ＩＣＵのチャプレンとなって数年たったとき、ある学生が、夕食をしているとき突然やってきて、「先生、五千円借して欲しい」と言うんです。二十年前の五千円ですよ。さすがの私も、「五千円？で、何に使うんだ」と聞いた。そしたら、「そんならいいです」と帰っていった。あとで聞いたら、彼が、五千円借してくれないかと友達と寮母さんに聞いたけれど断られた。教授にも言えない。最後に、牧師さんなら救ってくれると思ってきた。その牧師が、みんなと同じように、「何に使うのか」ときた。だから、「それならいらない」となったわけです。この学生はあとで中退した。それ以来、私は、そういう言い方をしないようにしています。

「ちょっと会いたいんですが」、「いや、明日の授業の準備があるから」。それは、言いわけになりませんよ。それ以来、原稿でも、私は――今日の原稿も――必ず一週間前につくる。そうしなければ、私、牧師ですから、お葬式などは突然きますから。学生が来たとき、「ちょっと待ってくれ、明日、お葬式だ」では間に合わない。イエス様の、一匹と九十九匹の羊の話があるように、一人の人が、今、救いを求めてきている時に、「明日締切りの原稿があるから」、「きょうは講義があるので」と、一人の学生でも放っておくわけにはいきません。先生方みなに、そこまでよくしろと言うのは酷かもしれませんが、少くとも、宗教主任はそうしてほしいと考えていますよ（笑い）。しかし、宗教主任だけではできないのだから、皆さんは彼を助けなければいけない。いわゆる知識を切り売りするのではなく、人格的な教育をするというのだったら、先生方がそういう態度でいない限り、絶対にできない。そういう意味で、キリス

ト教大学の教師の責任は非常に大きいんです。

国際教育に関しても、やはり、教師に非常に大きな責任がかかっておりますね。その学問も、単に日本に通用するだけの学問ではだめなのです。日本は、今、国際的になっているのだから、世界が今、学問的にもどのように発展しているかについて、たえずインフォメーションを持っている学者にならなければ、国際教育もできません。そういう意味でも、キリスト教大学の先生たちは、外国人の教師たちと接触を持つことができるので恵まれているはずです。ただ、その場合、日本では国際的というとアメリカ人しか考えていない。これは一方的すぎます。もっと、アメリカ以外の、とくに、アジア、アフリカの教師を入れるべきです。そうして、我々は、世界を知るべきです。それがなければ、やはり一つ目の教育ですね。このことについてキリスト教大学は、国立や公立に比べるとずっと自由なのですからね。フルタイムで教えなくても、ビジティング・プロフェッサーとか、いろいろな形で招くべきです。

私は、アメリカによく招かれて行きますが、やはり、開かれていますね。そして、日本人が何を考えているのか、アジア人が何を考えているのか、それを知りたいという意欲が、非常に強い。そういう意味では、日本は、これだけ国際化していながら、いつも日本の立場からしか物を見ていない。本当に外国人に聞こうという姿勢がない。それがあたりまえだと思っている。そうではないのです。すぐれた欧米の大学という所は、ＩＣＵよりはるかにインターナショナルですよ。ＩＣＵなんか、インターナショナルと言ったって、せいぜい先生の二十パーセントがノン・ジャパニーズ。ハーヴァード、プリンストンへ入ってごらんなさい。わざわざインターナショナルと言わなくても三割近くがブロークン・イングリッシュでしゃべっている外国人ですからね。

学問は、もともと普遍的なんですから。何人（ナニジン）でもいいのですよ。それを日本人だけに限るから、非常に狭いナショナリスティックな学問世界ができるわけです。頭だけで観念的に世界人類を愛するというのではなくて、具体的に黒

人だとか他の人種に接することによって、本当の国際教育ができる。そういう意味で、日本のキリスト教大学はもっと努力すべきだと考えているわけです。

宗教教育、これが一番むつかしい問題ですが、教師がキリスト教信仰、あるいは宗教というものをもっていなければ、もちろん宗教教育はできません。日本のキリスト教学校は、身分不相応にどんどん大きくしていったので、クリスチャンの数もいないくせにキリスト教教育をやろうという形になっています。そうすると、大部分はクリスチャンでない人に協力してもらうということになる。これも、ある意味ではいいと思いますね。クリスチャンが独善的にならないために。しかし、少くとも有効なキリスト教教育をするためには、先生方の少くとも一〇パーセントはちゃんとしたクリスチャンがいないと、キリスト教教育はできません。ある集団の中で、キリスト教ならキリスト教的な影響を与えようとしたら、成員の一〇パーセントのクリスチャンがいなければだめです。一〇パーセントいれば、あと一〇パーセントくらいのシンパがいますから、二〇パーセントいることになる。それくらいいると無視はできなくなる。だから、アメリカでも、なぜマルチン・ルーサー・キングの公民権運動が成功したかというと、あれは黒人が一〇パーセントいたからです。なぜ、韓国でキリスト教が盛んなのか。二〇パーセントいるのです、クリスチャンが。そうすると違いますよ。それが、三パーセント、五パーセントじゃあ、キリスト教という名前はおろした方がいい。「看板に偽りあり」なんですから。そこから考えても、キリスト者の教師が多く与えられないなら、キリスト教学校は考えない方がいい。

しかし、今、急にそれを望むことができないとするならば、現在いらっしゃるクリスチャンでない先生方が、少くとも、キリスト教について理解を深める方向にもっていくとか、あるいは、それらの先生方自身がキリスト教と対決していただきたいと思うのです。あきらめないで。あきらめる態度が一番いけない。それは学生に対して、キリスト

教に対して有害です。そうだったら、聖書が言っているように、冷やかでもなく、熱くでもなく、なまぬるいということですね。そんなことでいるよりは、反対ならはっきりと反対した方がいい。そこでお互い同志、真剣な議論ができる関係にならなければだめです。キリスト教は、きれいごとを言っているのではないですよ。だから宗教について、とくにキリスト教について、本当に自由に語れるような雰囲気、それが大学の教師の間にあるということが必要です。だから、研修会のときでもただお説教か何かを聞くということだけでは、意味ないですよ。時には牧師なんかつかまえて、おかしいとか何とか、批判してくれていい。そういう雰囲気がつね日頃からあるのが本当だと思う。最も自由な話しの場所を提供するのが、キリスト教です。もし、そうでないとすれば、そのキリスト教はおかしい。「真理は汝らに自由を得さすべし」と聖書は言っております。キリスト教大学が他の大学にくらべて自由がないというのは、おかしなことである。それでは真理に基づいている大学ということにはなりません。

そこで、宗教ということで申しますが、学問的な真理探究をすれば、宗教の問題は不可避だと思うんです。ハーヴァード大学の五十年代に総長だったピューシィの卒業式での言葉に「真に成熟した学者は、同時に人間としてもマチュアーな人だ」というのがあります。ピューシィ総長は、ノーベル賞をもらった並いる大学者たちがいる前で、次のように言ったのです。すなわち、「深い学問の最もすぐれた成果というものは、青少年期的な反抗心はもちろんのこと、遠慮や当惑もすることなく、むしろある人格的な親愛と畏敬と喜びの気持とを持って、神（God）という言葉を語り得る能力ではないか、と思う」。学者の中に、「神」なんて口にするのは恥かしいなんて思っている人がいます。しかし、これはおかしい。本当に真理を恐れるゆえに、そこで神という言葉を使えるという人、それが真に成熟した学者であり、真に成熟した人間だ、とピューシィ総長は言ったのです。〈成熟した学者〉――マチュア・スカラー――になること、そのことがキリスト教大学で求められているのではないでしょうか。そういう教師が一人でもふえること

によって、今日の日本におけるキリスト教大学の意義はますます明らかになっていくと思います。またそういう教師がいなければ、日本のキリスト教大学の意味はないと思います。

最後に、キリスト教大学の存在意義がどういうものか、具体的なお話をとおして、申し上げたいと思います。

私は今から十三年前、およそ一年間、日本国際交流基金から派遣されて、フィリピンのマニラにあるアテネオ・デ・マニラ大学に、イエズス会の経営しているカトリックの大学に行って教えたことがあります。フィリピンという国は、太平洋戦争中に日本軍がアジアでも一番悪いことをしたために反日感情が一番強かったところです。十数年前でも、まだ反日感情が強く、逆に、そういう所だから私はそこに行ったのですが、フィリピンで反日感情のとくに大きかった理由の一つは、フィリピンの女性に関係しています。フィリピンは、世界一女性の地位が高い国です。今世界中で女性解放運動が盛んですが、アメリカよりはるかに女性の地位が高いのがフィリピンです。フィリピン大学や、ほかの大学へ行ってごらんなさい。女性の教授の方が多い。また、ドクターの多くは、女です。ナースというのは男です。私は、歯を治すためにマニラの病院へ行ったとき聞いてみたのです。「何故、女の人がドクターで、男の人がナースなのですか」と。そしたら、「ここが違う」と、頭を指差して言うんです（笑い）。銀行なんかへ行っても、日本とは全く逆。前にズラーと並んでいるのは大学を出た男の人。一番向うで、マネージャーの席に座っているのは女の人。これは、すごく有能です。だから、ミセス・マルコスみたいなのが出る。体まで大きく見える、ご主人より。これには、いろいろ理由があるが、今は時間がないので申し上げないけれども。とにかく、女性の地位は非常に高い。このようなフィリピンに日本の兵隊が上陸して、婦女子に対して暴行したわけです。そういうわけで、彼らにしてみれば、日本人というのは野獣か、野蛮人だった。だから、対日感情がすごく悪い。

フィリピンは、スペインが四百年か支配していた。スペインは、あそこで悪いことをしたけれど、キリスト教を持ってきた。アメリカも、五十年間、植民地支配をしたが、教育を持ってきた。ところが日本は何をしたか。日本はマニラに入って行ったときに、バターンの死の行進とか、婦女子に対する暴行などをしたのです。だから、はじめは日本に期待した人もいたけれど、けっきょく反日になった。それが今でも残っているのです。それを知ってか知らずか、今も日本人は旅行に行って、昔の兵隊がやったことと同じことをしている。戦後の日本人は全く変わっていないという。ただ、昔の格好の悪い軍服から、かっこいいビジネス・スーツになっただけ。中身は全く同じだというのです。

ご年配の方しかご存知ないかも知れませんが、フィリピンの最後の日本の軍司令官は、山下奏文という大将でした。この人は山本五十六と並び称せられる大変な名将です。シンガポールを落したのもこの人ですが、いつも戦況が悪くなると第一戦におくり出された。それで日本軍が負けるという最後になって、マニラに送られた。しかし、山下さんが行ったとき、日本軍は風紀が乱れて、むちゃくちゃだった。彼は、それを見て、もうだめだと思った。この人が偉いのは「どうせ日本は負けるのだ。だったら、出来るだけ損害を少くして、一人でも多くの兵隊を、青年を日本に帰そう。それが自分の責任だ」と考えたところにあります。そのとき、日本軍はマニラから撤退して、バギオに逃げて、そこから、また、山中に逃げた。多くの日本人はこれを誤解して、山下さんは最後に逃亡しちゃった――と言ったが、そうではない。彼は、どうせ負けるのだったら無駄な血を流さず、一人でも多くの青年を日本に帰して、母国の復興のために尽してもらいたい、それをやるのが自分の責任だ、と考えたんです。だから、八月十五日、戦争が終ったと聞いたら、すぐに彼は白い旗を出して、山から下りてきた。そして「自分が全責任を持つから日本の兵隊は早く帰してくれ」とアメリカ軍に頼んだ。そして、この人は、戦争の末期に行ったけれども、戦争の始めの日本軍の残虐行為などの責任をすべて自分で背負って、絞首刑になった。大きなマンゴーの木がありますが、体の大きな人でね、綱で

つったんだけれどもあんまり重かったので切れてしまった。それで、もう一回くくり直して行われた。

この山下さんが亡くなる前に、教誨師に「自分は、最後に、日本の国民に遺言を書きたい」と言って、最後の十五分まで書いた遺書がある。私も非常に感銘を受けたのですが、彼は、その中でこのように言っています。「自分は、もちろん日本に帰りたいけれども、戦争責任を背負って絞首刑になる。だから、残念ながら日本の復興のためには参加できない。でも、これから帰ってゆく日本国民の若い人たちに、その分やってもらいたい。こういう馬鹿な戦争をした責任は、もちろん、われわれ軍人にあるけれども、同時に軍人だけではなく、日本人全体が考えなければならない問題がある。そういうことを自分は述べて、皆さんにお願いしたい」と、三つの必要な教育について述べている。第一に、「科学教育」ということです。日本は明治以来、欧米に追いつこうと思って、和魂洋才と言って、一生懸命科学技術を学んだが、実際は本当に学んではいなかった。本当の科学精神や合理精神を学ばなかったために、神風が吹くなんて言った。だから、戦後は徹底して科学教育をやってもらいたい。第二は「道徳教育ということ。明治以来、日本人全体が教育勅語によって教育されてきたはずなのに、自分が軍隊や兵隊を見ていると、フィリピンの婦女子に対しても、そういうことをするなと言っても、全然言うことを聞かない。上官の言うことを何にも聞かない。だから、義務の観念も全く育っていなかった。すなわち、道徳教育が欠けていた。第三は、自分は教育専門家ではないので、しろうと的な言葉を使うことをお許し願いたいが、自分が大事だと思っているのは、「乳房教育」だ。あの兵隊たちを見ていて、なぜ兵隊たちがあんなことをするのかと考えずにおれない。お母さんのおなかにいるときから、お母さんのお乳を飲むときから、どういう精神をお母さんから受け継いでいるかが問題だ。山下さんは若いときに、オーストリアに駐在武官で行ったことがある。そして、あちらでヨーロッパの婦人を見たのですね。その時、どうしても、日本の婦人たちは教養の点において、低い、本当の教養がない、と感じた。だから、お母さんの教育をしない限り、

あゝいう子どもができるのは止むを得ない。だから、日本がこれから新しく、本当に世界の平和のために、すべての人間が兄弟姉妹だという教育をするのは、学校に行ってからではなくて、お母さんにお乳をもらう時からすることが必要である。だから、婦人教育をして欲しい。これが、軍人の山下さんが最後に言ったことです。

私が、このことが本当だと思ったのは、フィリピンのマニラで何人かの家に招かれて話をしたときです。たいてい、その家のお父さんがいないとか、家族の人が日本人に殺された、拷問された、銃殺されたとか、必ずそういう話になる。私がやったのではないが、私は日本人ですから、そういうとき“I am sorry.I am very sorry.”と言うしかない。そのときに、二、三ヶ所の所でこういうことを聞いた。「いや、全部の日本人がそういう残虐なことをしたのではない。中には例外的な人がいた。」そして「例えば、ジンボー中佐のような人もいましたからね」と言うのです。

それで、私は、大学図書館へ行って調べたら「神保信彦」という参謀がいたことがわかった。この人のことをフィリピン人は今でも覚えているのです。なぜかというと、フィリピンの最初の大統領になったロハス大統領の命を救ったのが、この神保さんだったからです。ロハスというのは有力な政治家で、あのときケソンとかオスメニアとかいう大統領、副大統領は、マッカーサーと一緒に逃げてしまった。が、彼は残った。東条さんは、この人を大統領にしようとした。一番、人望があった政治家だからです。ところが、この人は志願して軍人になったので「自分は協力できない」と言って捕虜収容所に入っていたのです。何としてもこの人に協力させようと思った、東条首相の面白い話があるのですが、東条さんがマニラに行ったときに、ロハスさんを呼んで「アメリカは行ってしまったし、マッカーサーは〝アイ・シャル・リターン〟とは言ったけれど帰って来ない。これから日本がアジアのリーダーだから、俺たちに協力してくれ」と言ったのです。ところが、ロハスさんは、日本が勝つとは思っていなかったので、協力するとは言わない。しかし、東条さんはあきらめない。それで、ロハスさんは一計を案じて「心臓が悪いから無理だ」と言った

ので、東条さんは東京から大学の心臓専門家数人を早速派遣した。その先生方は紳士で、必ず診察に来る前に「これから行く」と言って電話をして来る。すると、ロハスさんは家の中をぐるぐると走り回るんです。リーンとベルが鳴るとベッドにとび込む。どこを診ても悪いところはないが、動悸がすごい。これでは無理だというので東条さんをあきらめさせたという話があります。

実はその前に東条さんの命を受けて、ロハスさんの説得役を仰せつかったのが神保中佐でした。説得しようとする神保さんにロハスはこう言ったという。「日本は絶対に勝てない」と。捕虜ですよ。捕虜なのにそう断言する。日本は勝てるはずがない。無理だ。自分はかつて大蔵大臣をやっていたから、飛行機が一日に何台できるか知っている。アメリカのダグラスやロッキードが一日に作っている台数と、日本の中島が作っている台数とは天と地の差で、アメリカに勝てるわけがない、と、こう言うんです。神保さんは、「戦争というのは、兵器だけではない。精神だ。我々には大和魂があるから」と切り返した。ロハスも負けていない。日露戦争までの日本の軍隊には、まだ、そういうのがあった。だけど、それ以後の日本の兵隊は駄目になった。日露戦争の時には捕虜にたいしても人間として扱っていたが、今はメチャクチャじゃあないですか。これじゃあ日本は勝つ資格はない、と言う。神保さんは、「こいつ、生意気だな」とは思うけれども、本当のことを言うから逆に感心して尊敬するようになる。そして最後には、何とかして生かしてやりたいと思うようになる。そして、ついに生かすわけです。マニラから処刑命令がきたのに、参謀長に直談判をして命令を取り消させ、ロハスをマニラの自宅におくりとどけました。東条さんとの話はそのあとです。その後、神保さんはあんまりフィリピン人に親切にしすぎると、中国戦線にまわされ北の方へ行って、そこで戦争が終わる。ロハスさんは自分が大統領になったときに、中国の当時の指導者、蔣介石に次のような内容の手紙を書いた。

「私が、今日、大統領でおられるのは、実は、神保信彦という日本の軍人のおかげです。あの残虐な行為をした日本

人の軍人の中で、彼だけは最も人間的（ヒューマン）な軍人でした。この人のおかげで私は救われたのです。聞けば、彼は天津の捕虜収容所にいるというから、特別に許してやって欲しい。もし、中国に行って悪いことをしていなければ。」それで調べたら、もちろん悪いことはしていない。彼は中国へ行っても、ミッションスクールの建築のことなど助けている。それで、神保さんは直ちに釈放され帰国することができた。

このことを、私は『形成』という雑誌に書いたんです。そしたら、たまたまある人が、「神保さんという人は、まだご存命です」というので、大木英夫先生と一緒に会いに行きました。そして「何故、あなたは日本軍人の中で例外的な、そんな人になられたのですか」と聞いたら、しばらく考えておられたが、「そうですねェ、おそらく母の影響でしょう」とおっしゃるんです。そのお母さんは、若いとき仙台の宮城女学院で教えていた宣教師クリーテ先生から洗礼を受けた人で、神保さんは子どもの時教会学校に連れて行かれた。その時に聞いた話で、人間はすべて神様の前に平等で、兄弟姉妹だという考えが頭にあったから、軍人教育などいろいろ受けたけれども、フィリピン人を見た時に、馬鹿にするのではなくて、兄弟のように思えた。そう言えば、それは、お母さんのおかげだったと思うと。私はそれを聞いたときに、「ああ、日本におけるキリスト教およびキリスト教学校の存在意義はここにあるな」と思いました。聖学院の卒業生や関係者の中にも、こうした人は必ずいるはずです。そういう人々を我々が今教育していると考えれば、現代日本におけるキリスト教学校の存在意義と我々の責任はいよいよますます重大になると言わざるを得ないと思います。

ご静聴、どうもありがとうございました。

一九八五年一月一六日

第一回　教職員研修会基調講演